

## 第1回

### 自学自習

なんとかして学びを守りたい。  
どうすれば学びを保障できるのか？

新型コロナウイルス感染症の影響で学校が機能不全に陥りそうないま、こうした願いや思いは教育関係者だけでなく社会全体で共有されているように思います。そのようななかで注目されているのがオンライン教育です。教室を完全に再現できないにせよ、なるべくそれに近づくようたくさんの知恵が出されさまざまな工夫が展開されています。

しかし課題は山積しています。オンライン教育に適った環境整備がなされているのか？ どう教材を作りいかにして教えるのか？ 意欲をもってどのように学んでいくのか？ これらの喫緊の課題に、ほんのわずかな時間で、どうにかして正解のない答えを出し続けていかなければなりません。

みんなが自宅にいてそれぞれに学ぶ、これほどまでに「自学自習」が求められたことはなかったのではないのでしょうか。「自学自習」は、活字メディアを中心とする通信教育や多様なメディアを組み合わせる遠隔教育が大切にしてきた考え方であり実践です。

終戦後の焼け野原のなかで産声を上げた通信教育は、その歩みの途上で遠隔教育という新たな位置を得つつ、社会の発展に伴うさまざまな課題（教育の機会均等、再教育、生涯学習など）に応じながら「自学自習」の実践を積み重ねてきました。

教材をじっくりと読み相手の声に耳を傾けること、思いや考えを納得いくかたちでレポートに書き表すこと、相手とのかかわりのなかで自分なりの問いを立てること。そしてなにより、学びとは一人ひとりの個性を尊重したものであること。

通信教育や遠隔教育は、一人ひとりが教材や相手と向き合い、自分自身と向き合うために、学びの「時間」を大切にしてきました。教室という「空間」もさることながら、一人ひとりの自主性や自発性に基づいた学びの「時間」を大切にしてきたのです。

この自学自習の実践を通して、通信教育や遠隔教育は既存の教育システムや社会に対してこう問いかけてきました。

同時双方向だけが教育なのか？  
対面しない教育は偽物なのか？  
学びとはいったい何か？

いま、この問いかけを聞いてどう感じたでしょうか。おそらく次のような反応が大半でしょう。

非常事態の最中になんと悠長なことを。わかるけどいまはそれどころではない。授業をなんとかまわすことで手一杯だ。

そのとおりだと思います。ラディカルな問いかけは、概して緊急や切迫のなかで発せられます。しかし、それがラディカルであるためにかえって、非常時に聞き入れられること

は難しいでしょう（上記の反応のように）。だからラディカルな問いかけは、平穏な日常においてようやく聞き入れられます。けれども、問いかけが聞き入れられる頃には、その問いが醸し出す緊迫感や切迫感はすっかり色あせてしまい、日常の思考のもとで（無難に解釈され）そのラディカルさを失ってしまっているかもしれません。

それではどうすればよいのでしょうか。ラディカルな問いをそのままに受け入れるためには何が必要なのでしょう。残念ながら、答えを持ちあわせていません。

いまは非常事態で、なんとかして学びを守らなければなりませんし、どうすれば学びを保障できるのか、とにかくやるしかない状況です。それと同時に他方で、「とにかくやるしかない状況」と、受け継いできた先人の思いとを共存させることはできないものかとも感じているのです。

下記は、教育の民主化を支えてきた自負とこれからの社会の発展に向けた願いのもとに述べられた言葉です（日本通信教育学会編『日本の通信教育』1957年、11頁）。

通信教育では、受講者は、それぞれ自宅にあってみずからの能力と時間に応じて、自学自習することを原則とする。したがってその学習活動は、受講者の個性に基づき、それぞれの自主性を基調として展開するものであって、これによって確立される望ましい学習態度は、その人の一生に大きな意義をもつものといつてよい。

いまを生きるために自学自習はどうあるべきか、それが問われています。

古壕典洋（星槎大学・非）